町畑小

主体的に学び合う子どもの育成

～「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を目指して～

（３年計画の２年次）

校長　　後　藤　　浩

１　研究主題について

本校では、教育目標の「心豊かにたくましく」及び努力目標の「すすんで学ぶ」を受け、「自分の考えを表現できる子」を目指す児童像として教育活動を展開している。昨年度から研究主題を「主体的に学び合う子どもの育成」とし、児童が主体的に取り組む課題設定の工夫と学びを広げ深める手立ての工夫について国語科の説明文を中心に据えて研究を進めてきた。

本校の児童の学力は二極化傾向にあるため、まずは、どの児童も授業に参加できる「授業での居場所づくり」を目指した。授業の導入部では、児童から疑問を引き出すように教材提示の仕方を工夫し、選択肢を設けて児童が立場を選択できるようにしたことで、多くの児童が自分の考えをもって授業に参加することができるようになった。また、選択した立場を赤白帽子やネームプレート、タブレット端末等を用いて可視化し、お互いの立場の違いを明確にすることで追究意欲を増幅させることができた。その後、児童は自分の立場に基づく根拠や理由を表現するための活動に取り組み、意見交流を通じて自分の考えを広げたり深めたりすることを目指したが、一部の活発な児童の発表で授業が進んでしまうことが多かった。

そこで、３年計画の２年次として、今年度も国語科の学習を中心に据え、立場の可視化を生かした意見交流の方法を追究した。友達の考えとの共感や比較から自分の考えが広がったり深まったりしたことを表現させることで、学力の定着につなげたいと考えた。

２　研究のねらい

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を目指し、主体的に学び合う子どもを育成するための国語科の指導の在り方を明らかにする。

３　研究仮説

児童が主体的に取り組む課題設定の工夫、協働的に解決する場面にて学びを広げ深める手立ての工夫を行うことで、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

４　研究内容

⑴　児童が主体的に取り組む課題設定の工夫

ア　教材提示や発問等の働きかけ

イ　自分の考えや立場の可視化

⑵　学びを広げ深める手立ての工夫

ア　立場の可視化を生かした意見交流の方法

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく研究授業等

月	日	学年・授業提案者（報告者）・題材名・講師
6	20	第１回授業研究（２学年）　授業者：長瀬　さおり　国語「どうぶつえんのじゅうい」 講師：八戸市立吹上小学校　教頭　福田　秀貴氏
11	21	第２回授業研究（５学年）　授業者：和泉　範子　国語「たずねびと」 講師：八戸市立長者小学校　教頭　上柿　尊志氏

⑵一般研修

月	日	内容・講師
4	19	「エピペン対応講習会」 講師：本校養護教諭　佐藤　春花
6	7	「ICT 講習会」 講師：本校教諭　乙山　竜太郎
7	12	「救命救急講習会」 講師：八戸市東消防署署員
8	21	「図画工作講習会」 講師：本校教諭　三浦　真弓
2	21	「特別活動講習会」 講師：本校教頭　舘　朋美

６　研究の成果

⑴　授業の導入において、ずれや疑問が生じるように教材を提示し、立場をネームプレートや１人１台端末を用いて選択して表明させたり、スケーリングに表明させたりして可視化したことで、根拠や理由を表現しようと主体的に課題解決に向かう姿が多く見られた。

⑵　同じ立場同士で考えを伝え合う中で根拠や理由が広がり、異なる立場の相手に自分の意見を伝えることに自信をもつことができて効果的だった。

⑶　展開部分において、考えを変えた児童や変えなかった児童に理由を問い、発言を促すことは、児童の学びを深めることに効果的だった。振り返りにおいても、自分の変容を振り返る児童が増えた。

７　研究の課題

⑴　立場の可視化は児童の課題解決意欲を高める方法となったが、根拠や理由を表現するための手立てを必要とする児童もいる。より多くの児童が意見交流に参加できるように、つまずきに対する手立てを充実させるとともに、教育活動全体を通じて児童の話す機会を増やし、伝えることを躊躇しない支持的な学級の風土づくりを通して、伝え合う力の向上を図る必要がある。

⑵　教師がファシリテーターとして児童の考えをつないだり、掘り下げたり、ゆさぶったりして意見を交流させ、授業のねらいが達成されるように、各教科や領域へと研究の幅を広げて今後もスキルアップを図っていく必要がある。

（記入者　髙谷　園江）